

## 2021年に瀬田川上流水域で発生した チャネルキャットフィッシュ幼魚の個体数

石崎大介・田口貴史

### 1. 目的

近年、県内において特定外来生物チャネルキャットフィッシュの確認数が増加し、洗堰上流の瀬田川や琵琶湖南湖においても生息が確認されている。2019年に続いて2021年も洗堰直上の水域において標準体長（以下、体長）約200mmの幼魚が多数採捕され、水域内での繁殖が示唆された。適切で効果的な駆除を行い、漁業被害を未然に防ぐためには、対象種の生息量を把握する必要があることから、幼魚の発生個体数を推定した。

### 2. 方法

洗堰上流においてチャネルキャットフィッシュの採捕が集中している洗堰から京滋バイパスまでの約1.5kmの区間において、水産試験場が実施した延縄調査および滋賀県漁業協同組合連合会が実施した駆除事業における採捕データを用いてゲルリー法により、個体数を推定した（図）。周辺での採捕状況からこの水域から個体の逸出はないと仮定した。幼魚は7月下旬に採捕されるようになり9月から集中的に採捕され始めた。また10月26日まで採捕され、その後は11月末まで3回採捕が行われたが、幼魚は1尾も採捕されなかった。このような状況や2019年における幼魚の推定期間を考慮し、十分に加入が終了し水温低下による採捕効率への影響が少ないと考えられる9月2日から10月26日までの15回のデータを使用して推定した。期間中に採捕された体長160～252mmの34個体を同一年級群の幼魚として解析に用いた。各回の針数は異なっていたことから、対象水域での採捕数を針数で除してCPUE（採捕数/針数×100）を算

出し解析に用いた。

### 3. 結果

当初資源尾数は55個体と推定され、調査終了時は21個体が生息していたと推定された。2019年の同水域での幼魚の発生個体数は約200個体であり、2021年は2019年と比較して幼魚の発生は小規模であったと考えられる。また、発生個体数は2019年の1/4程度であり、2021年9月のピーク時のCPUEが2019年のその1/4程度であることと一致し、推定値は妥当だと考えられる。これらの幼魚は1歳魚と予想されることから、2020年に繁殖したものと予想され、2019年から始まった同水域での駆除事業により親魚が減ったことにより幼魚の発生が少なかった可能性もある。調査終了後も20個体の幼魚が生息していたと推定されていることからこれらが成熟する前に駆除することが必要である。

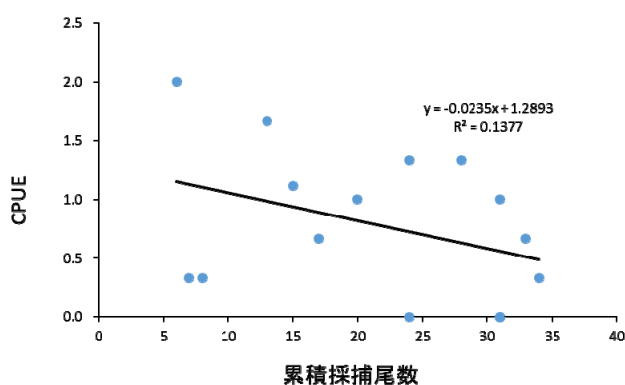


図 累積採捕尾数とCPUEの変化